

第11回新潟てんかん懇話会

日時 平成元年10月21日(土)
会場 新潟シティホテル 本館

一般演題

1) 異常脳波を伴う精神病患者の2例

武内 広盛 (国立療養所犀潟病院)
精神科

症例1. 34歳男, 末端肥大症の既往あり。20歳時幻覚妄想状態で発症。新大精神科で入院治療。復学卒業後, 統一原理に参加中再発。心気妄想・体感幻覚, 空笑, 徘徊, 独語, 不穏・興奮, 暴力を認めた。その後, 処遇困難傾向が募るため, 昭和59年4月犀潟病院に転院。大量のHPD, ZTP, LMPを服薬させた。幻覚妄想が激しく, 挿間性に執拗・暴力的となるため, 昭和63年8月電撃療法施行。昭和63年10月自発性に全身の強直間代痙攣あり, 以後月一回程度の頻度で同様の発作を見る。脳波所見は, 電撃療法以前には θ 波の混入をみるが正常範囲にあった。自発性の痙攣発作出現後は, 左側Fp, AT, Tにspike and waveが出現した。症例2. 26歳女, 高卒後医師会立看護学校通学。二年目の12月精神変調。不食, 緘黙, 昏昏迷状態で精神病院入院。昭和60年4月犀潟病院受診。減薬で活動的となるが幻覚妄想再燃, 同年12月入院。疎通性良好だが, 衝動行為や性的逸脱, 感情不安定, 自殺企画や失踪があり2年の経過で退院し就職。以後ほぼ完全寛解状態を続けた。平成元年2月緘黙, 被害念慮, 幻聴, 感情不安定となり再入院。脳波は平成元年1月まで, 頭蓋前方でburst様に θ 波が出現するが, spikeの出現はない。2月diffuse synchronous spike and wave出現。これが4月消失しその後正常脳波が続いている。9月Pentetrazol賦活脳波記録。Spike and waveが5.7mg/kgで賦活された。〔まとめ〕症例1は, 電撃療法後自発性に全身性の強直間代痙攣が出現し, 脳波でもてんかん性の異常所見であるspike and wave complexが, 左側Fp, AT, T, Cに認められた。電撃療法前には痙攣発作もなく, 脳波も正常範囲にあったもので, 文献的に電撃治療後に自発性痙攣発作を見たとする症例報告に一致するものと考えられる。症例2は, 長い寛解状態を経て, 精神分裂病様の症状が再燃したものであるが, 疎通性は良好で, 硬さや冷たさがなく, 一方で易刺激性の亢進, 憤怒性の強さが際立ち, 分裂病とは微妙に鑑別された。脳波所見では, 二回目入院

時にspike and waveが見られ, それが消失後も臨床症状は不変であった。自発性のてんかん発作は一度も認められず, 沢らの方式に従ったpentetrazol賦活或値が5.7mg/kgであったことから, この症例は沢のいう「類てんかん精神病」と診断される。

2) 寺泊病院における非てんかん患者の予後調査

田村 絹代・金子 晃一 (新潟大学精神医学教室)
笹川 睦男*・長谷川精一* (*国立療養所寺泊病院)
梶 鎮夫*

寺泊病院では, 患者の示すてんかん様の症状が真にてんかん発作かどうかの鑑別診断を依頼されることがしばしばある。そうした「てんかんではない」と診断した患者の予後と治療状況を, 患者へのアンケートの形で調査したのでその結果を報告する。

〈対象と方法〉

1983年から1988年中に寺泊病院を受診した1665人中, 発作性の症状のない人, てんかん, 明らかに脳器質性疾患であるもの, などを除外して178人の対象を得た。すでに死亡が確認された2人を除き, 176人にアンケートを送った。調査期間は'89年3月末から4月いっぱいとした。回答は89人で(男性45人, 女性44人), 回答率50.6%であった。

アンケートでは, 当院受診時の症状が現在も引き続きあるかどうか, 症状が持続している場合の治療状況, 治療していない場合はその理由, さらに当時の別の症状があるかどうか, これまでの服薬, また現在の服薬の状況を尋ねた。

〈結果〉

- ① 『非てんかん』と診断されて回答のあった89人において, 受診時主訴は転倒・意識消失19人, 頭痛15人, 腹痛12人, ふるえや硬直などの発作様動作12人, 睡眠中のびくつき5人であった。
- ② 当院での診断は, 疑似発作15人, 失神・めまい11人, 頭痛11人, 腹痛12人, 生理的ミオクロニーが7人であった。
- ③ アンケートによる予後調査では, 現在も受診時と同じ症状を持っている者が89人中42人(47.2%)で, その診断としては疑似発作が11人と最も多かった。
- ④ 上記42人中, 現在服薬治療中の人は24人で, 『てんかん』と言われている人が5人いた。この5人の当院受診時診断は, 疑似発作3人, 生理的ミオクロニー1人等だった。このようにいったん『てんかん』の診断を除外されたり, 抗てんかん薬を中止してもまた再開する例も